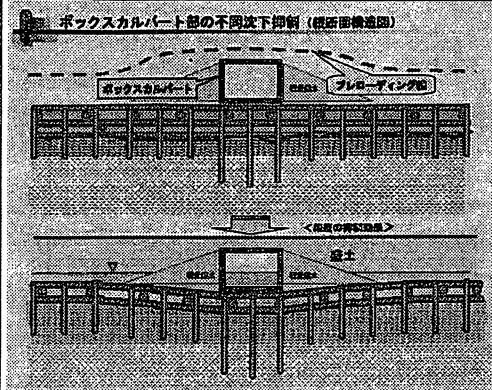


地盤工学会九州支部の「地域資源を活用した地盤技術」講演会



間伐材を使った軟弱地盤基礎工法の横断面構造図

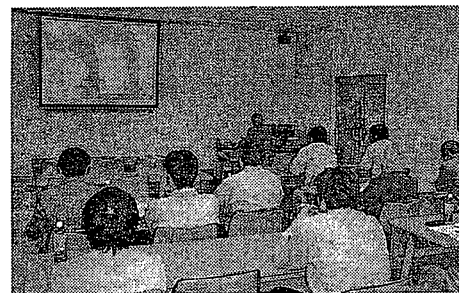
佐賀大学理工学部の教授など3氏が講演。まず、同大低平地研究センターの林重徳教授が「間伐材を用いる軟弱地盤盛土基礎工法(ラフト&パイル工法)」の演題で講演。林教授は、間伐材で筏(ラフト)と列杭(パイル)を組み合わせた工法を、有明海沿岸道路の盛土基礎工法として提案。国内外の過去の土木遺構を参照し、「地下水位下に基礎を沈めれば、千年単位の耐久性が得られる」と強調。また、盛土部にボックスカルバートを抱き合わせ軽量盛土材を使えば、中央部の不同沈下も抑えられる、と説明した。さらに、「有明海沿岸流域には間伐材が余っている」と述べた。

地盤工学会九州支部は22日(金)「地域資源を活用した地盤技術」に関する講演会をC PDプログラムとして佐賀市の佐賀大学菱の実会館で開いた(写真)。約20人が参加。地球温暖化対策として間伐材を用いた軟弱地盤盛土基礎工法などの講演が行われた。

林佐大教授 有明海沿岸道路は間伐材で盛土基礎を

最後に、同大都市工学科の鬼塚克忠教授が「軟弱な建設発生土・有明粘土の地盤材料化」の演題で講演。鬼塚教授は「建設工事の際、大量に発生する有明粘土を地盤材料化できないか」とのテーマで15年以上前から行ってきた研究成果を披露。有明粘土を生石灰で改良・固化した際、塩分を多く含んでいる方が強度が出る事や、腐食酸など有機物を含んでいると固化しないことを解説。また、酸化・風化すると強度が減る事から「現場から採取した場合、シートをした方が良い」とアドバイスした。

続いて、日本建設技術(株)の原裕社長が演題「廃ガラスを再資源化した軽量骨材を用いた土木技術」で講演。自社の発泡廃ガラス材「ミシクルソル」を用いた環境土木工法を紹介。地球温暖化対策として、緑化や水質浄化等の施工事例などを解説した。



佐賀建設新聞

発行所

株式会社 建設新聞社

〒849-0301

小城市牛津町乙柳1145-7

☎ (0952) 66-5750(代)

Fax (0952) 66-5751

購読料 月額5,775円(税込)

毎週火・木・土曜日発行

社団法人日本専門新聞協会会員

ホームページ

<http://www.kensetsunews.co.jp>

e-mailアドレス

kssaga@ltime.ocn.ne.jp